毎日新聞寄附講座「ジャーナリズムの現在Ⅱ」

第 12 回「災害とネットジャーナリズム」

～掲示板･ある火山学者のひとりごとを例に～

2007.01/09 平塚　千尋

Ⅰ、ネットジャーナリズム

＊　ネットジャーナリズムとは、
　　ジャーナリズムの要件
　　ネットジャーナリズムの成立
　　インターネット技術、ブロードバンドの展開普及
　　既存ジャーナリズムの限界

＊　ネットジャーナリズムの種類
　　既存マスコミのネット版、ニュースサイト
　　ネット独自の新聞・雑誌、放送
　　ＨＰ、掲示板(個人、団体)、ブログ、ポッドキャスティング、
　　（ＳＮＳ、Mixi、You-Tube）

＊　災害を中心にしたネットジャーナリズム
　　阪神大震災（1995.1）･･･マルチメディア時代の入口
　　有珠山噴火災害（2000.3～）･･･IT 社会
　　　インターネットがマスコミになった
　　三宅島噴火災害（2000.6～）
　　　インターネット空間にジャーナリズムが生まれた

Ⅱ、ジャーナリズムとしての掲示板「ある火山学者のひとりごと」

＜別紙資料参照＞

＊　噴火の推移と「ひとりごと」の生成・展開
　　ネットに殺到したマスコミ
　　研究者、火山おたくに島民書き込み参加、情報交換の場に、
　　8/18 大噴火･･迫る危機感、参加者増加・層拡大、噴火情報の広場化
　　8/29 火砕流･･実況中継、全島避難の引き金

＊　「ひとりごと」の分析、ジャーナリズムとしての構造と機能
　議題設定、論議･提言、合意形成
　削除：編集機能(間接的編集)、方針の共有
　アクセス増加、社会的影響

＊　ネットジャーナリズムの特徴
　１：Ｎ　→　ｎ：Ｎ
　送り手・受け手　→　双方向
　プロジャーナリスト　→　一般市民

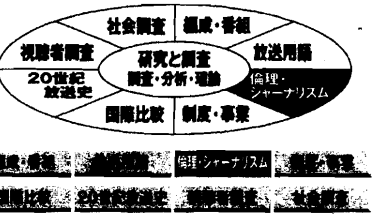
Ⅲ、新たなジャーナリズムの世界

マスコミ産業の情報寡占体制の崩壊
市民発信・市民参加
各種メディア間の情報の流通
多様な視点、多様な情報の可能性

以上

インターネット空間における ジャーナリズム・試論

～「ある火山学者のひとりごと」を例に～



放送研究主任研究員　平塚千尋

マスメディアにまで成長したインターネットの空間に、新しいジャーナリズムが生まれつつある。その特徴が最も顕著に現れているのは掲示板で、そこには今までのマスコミ、ジャーナリズムとは異なった構造と形態を見ることができる。掲示板「ある火山学者のひとりごと」（2000年6月26日三宅島火山活動開始から9月4日全島避難まで、71日間3,080の投稿）を具体例に、その分析と考察の一部を紹介する。

1. マスコミより早かった掲示板の報道

いつも通り、噴煙が上段と下段に分かれたように見えた後、下段の雲（雲じゃないけれど）がすごい勢いで周囲を埋め尽くしていきました。最も視界の悪いときは、2m先にある白い車が全く見えなくなりました。20mほど先にある街灯（都道にある街灯と同じ物です）の光は最初から全く見えません。なお、ものすごい硫黄臭です。戸は閉まっているのですが、隙間があるためか、ドアそばに行くと、むせかえるほどです。（投稿番号No.3764、8/29　05：19）

雨の音はしているのですが、外が全く見えません。換気扇などの隙間から、霧状の、灰なのか、ガスなのかわからないのですが、部屋に入ってきています。空中で対流しているようです。くさいです。（No.3785、05：37）

部屋に入ってくる、ガスはどうやって防いだらいいのでしょう…？鼻が痛くなってきました。息苦しいです。（No.3796、05：46）

なんだか、部屋の中まで視界が悪くなってきたなぁ。一応換気扇は回しているんですが、それでも、換気扇から霧が逆流してきます。あれだ、アウシュビッツのガス室みたい。天井からガスのシャワーが降ってくる図。

台の上を手でふくと、手が若干べたつきます。もーすごく臭い。（No.3805、05：52）

部屋の中のガス充満は止まった模様です。（No.3825、06：08）

これは2000年8月29日午前4時35分、三宅島が噴火した時に、低温火砕流の下からある島民女性が実況報告したものである。この他にも島内各所から噴火の様子がリアルタイムで報告され、火砕流発生の決定的な写真も掲載された（No.3854）。

とは言ってもこれは新聞紙上でもテレビのニュースの中でもない。インターネットの掲示板「ある火山学者のひとりごと」上のことだった。この時、島民や学者・研究者、一般市民が書き込んだ情報は、気象庁の発表、マスコミの報道よりも早く、しかもその後気象庁、マスコミさらには国、都の災害対策にも大きな影響を及ぼし、今年でまる2年を迎えた全島避難のきっかけともなった。

この日掲示板への投稿数は、火砕流下からの噴火報告、行政の災害対応をめぐっての情報や批判・提言など、島内外から282件にも上った。

図1　日別 投稿件数・削除件数

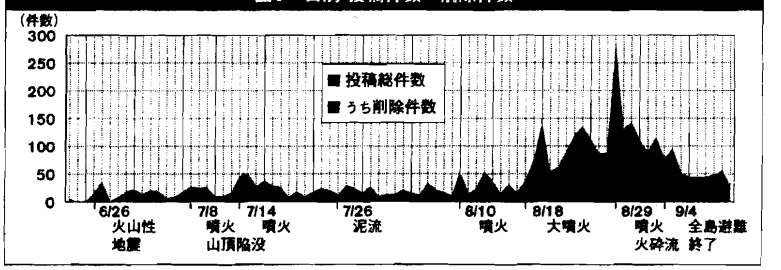
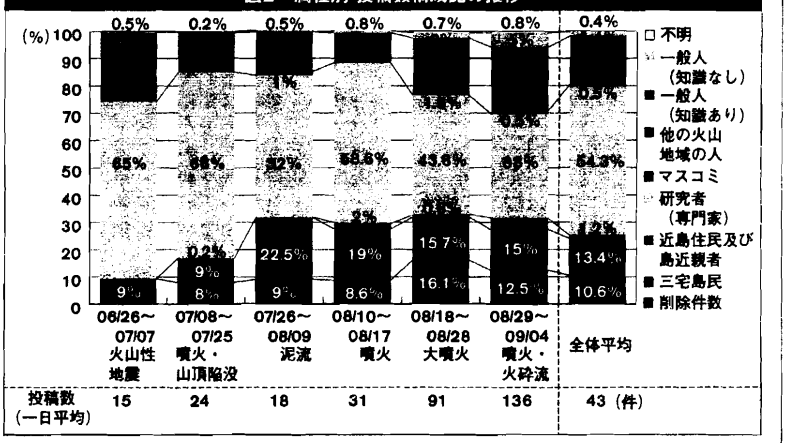


図2　属性別 投稿数構成比の推移



2. 掲示板「ある火山学者のひとりごと」

掲示板の生成と展開

掲示板「ある火山学者のひとりごと」（以下「ひとりごと」と略す）は1998年4月、航空測量会社に勤める火山研究者が、学者や火山に関心を持つ市民の情報交流の場として開設した。掲示板は2000年3月の有珠山噴火を通じて広く知られ、同年6月からの三宅島噴火を通じて島民や一般市民が多数参加、爆発的に拡大していく。掲示板上では三宅島の噴火活動の進展や災害状況・防災対策の変化に応じて起こった問題をめぐって、次々と新たな投稿者が加わり、情報交換・論議が展開されている。

図2は投稿者を噴火活動や災害の節目ごとに、属性別構成比でまとめたものである。

当初、掲示板は学者・研究者と火山に興味・関心のある市民だけの投稿だったが、7月8日の、山頂が大陥没し火山灰も降った噴火をきっかけに、初めて島民が参加し、現地の情報を送り始める。噴火・降灰が続き、7月26日、火山灰による泥流災害が起こると島民参加が急増し、降灰の状況、火山灰の性質、泥流の危険性、泥流対策、噴火活動の今後をめぐって学者・研究者との間で頻繁な情報交換が行われ、信頼関係、連帯感が生まれていった。

有感地震が頻発する中、8月10日に中規模の噴火がありその後も毎日のように降灰が続くと、掲示板では噴火予知連や気象庁の「収束する方向」という見解と

は逆に、今までにない噴火シナリオの展開が話題になり、噴火活動への危惧が生まれてくる。

18日、噴煙の高さ14,000メートル、噴石を伴う大噴火が起きると島民の緊迫した実況報告が各所から入る。島民の間に危機感と焦燥感が深まり、全島避難の声が高まる。この段階ではインターネットの出来る島民のほとんどが参加し、気象庁、噴火予知連、マスコミ、行政への不信・不満が書き込まれる。また有珠山噴火の体験者、一般市民の参加が増え、災害対応、防災制度や法律、いざというときの具体的な避難方法までが提案・論議された。

こうして噴火の度ごとに新たな投稿者が参加し、投稿数が増えていく。それと共に中心的役割を果たしていた学者・研究者の比重が下がり、掲示板は島民、一般市民と幅広くなっていった。例えて言うなら、噴火・災害の進展の各場面にあわせ、情報を持つ新しい適任の役者が登場し、ピッタリのせりふで役回りを演じて、掲示板という舞台を盛り立てたという事になる。

削除・掲示板の編集機能

一方、図1を見ると明らかなように「ひとりごと」では削除件数も少なくない。削除には書き損じや重複投稿、事実誤認など投稿者自身の手によるものもあるが、多くは掲示板の管理者によるものである。

削除の対象とされたのは

- **誤った内容や関連のない投稿**
- **特定の個人や組織に対する誹謗中傷**
- **感情的・刺激的な用語や表現**
- **島民に無用な不安を与えかねない極端で悲劇的な噴火シナリオ**

などで、1日のアクセス数が10万を超え、掲示板が社会的な影響力を増すにつれて増え、18日の大噴火後の島民の間に危機感が溢れた第5段階では実に16%に達している。

厳しい削除に当初は投稿者から批判がなかったわけではない。しかしそのうち参加者に納得され、編集方針は共有化された。そして「これは削除されるかもしれませんが…」、あるいは「管理人さんこれは削除して頂いて結構です」といった言葉を入れて投稿したり、どうしても意を伝えたい時は露骨でストレートな表現を比喩に変えたり、「詳細は自分のホームページを」と見出しふうの案内だけを書き込むなど、編集方針を尊重しつつ高度な表現テクニックが用いられている。

いずれにしても削除が掲示板の方向性を示し、荒れるのを防ぐ上で、重要な編集機能の役を担った。

ジャーナリズムとはマスメディアの空間上にマスコミという形態、制度を通して現れる言論表現活動であり、その基本的要件としては①速報性、更新性、ジャーナル性、②編集機能、③反権力・反権威の批判精神、④社会的影響力、世論形成機能が上げられるが、こうして見ると掲示板「ひとりごと」はジャーナリズムの要件を十分満たしていることが分かる。

3. ネットジャーナリズムの特徴

玉石混交・その情報的意味

インターネットの掲示板については、内容が玉石混交、落書きのようなもので信頼性に欠け、熱しやすく冷めやすく、永続性がないとしばしば言われる。確かに「ひとりごと」の場合も削除すれすれのものまで含めてレベルの異なった様々な情報が混在していることは否定できない。しかしこれは掲示板が従来のマスコミ、新聞や放送とは基本的に異なった独自の構造と形式を備えているからで、ネットジャーナリズムの特徴、可能性と限界もそこにあるといえる。

インターネットの掲示板の特徴は、マスコミの1：N（1対多）とは異なったn：N（多対多）の双方向でフォーラム形式の情報交流の形態をとること、メーリングリストなどに比べても公開性が高く、誰でも容易に参加できる事にある。

投稿内容を見てみると一般の掲示板同様①情報提供、②意見表明・交換、③通信・連絡のそれぞれが併存している。

「ひとりごと」では情報提供は島民が噴火や被害状況について現地から報告したり、研究者や機関がデータや写真を提供したり、あるいは行政関係者などが内部情報を紹介・報告するもので、いわばそれぞれの現場・立場からの情報提供、あるいは情報源のURLや文献の紹介である。

意見表明・交換は複数の関係者や専門家が異なった見解・評価を示したり、意見を述べあう場合である。これは噴火や火山ガスなど自然科学的な問題に限らない。社会的評価や判断、情報伝達のあり方、行政対応、防災制度・法律、さらには避難方法など社会的な問題をめぐっての批判や主張、論議もある。そしてさらにジャーナリズム性は低いが災害情報では欠くことのできない通信・連絡がある。

これらが併存する事はネットジャーナリズムでは避けることが出来ず、情報が玉石混交であるというのは構造的なものといえる。しかしそれは見方を変えると、情報の収集・提供、解釈、意見の交流・交換という取材や編集・整理の過程が掲示板上に現われている事に他ならない。逆にいうなら情報を取捨選択し、編集・整理する作業が参加者個々人に求められているともいえる。

双方向性・誰でも送り手と受け手の構造

もう一つ注目すべきことは、掲示板に特徴的な双方向、n：Nのコミュニケーションが、これまでのマスコミ論で不可欠とされた送り手・受け手の構造を根底から覆す点である。

ネットジャーナリズムにあっては、誰もが受け手であると同時に送り手でありうる。ここではマスコミで不可欠とされる専門のジャーナリスト、あるいはその集団は必ずしも必要とされない。ネットジャーナリズムでは、ともするとマスコミを支配しがちな会社・組織や資本・市場の論理を離れて、むしろ普通の市民が、生活者の目線で日常を、あるいは自分の得意とする専門の分野について発言、表現、コメントしあうことになる。ジャーナリスト的な感覚があれば、専門家の知識、市民の発想で十分成り立つ世界である。

この場合のジャーナリスト的感覚とは、一つは削除の基準が共有されること、つまり編集方針が共有される事である。それは同時に掲示板の場における公共性意識、市民意識の自覚・共有であり、その上に立った言論・表現活動ということになる。

専門性、適時性

最後にネットジャーナリズムは政治・経済・社会から生活・文化まですべてをカバーする総合ジャーナリズムではない。むしろ分野限定の専門ジャーナリズムである。

従って新聞や放送のように決まったスペースや時間を埋めるものではなく、情報の内容の多寡により長短自由で、その領域で事件や事故、ニュースがある時は長大で活発にもなるし、何もない時は縮小停滞する。つまり一過性というわけではないが、活動期と日常期、休眠期があり、必ずしも恒久・継続的ではない。そのテーマが時代のトピックス、社会的関心の的になっているときは活発になるわけで、ある意味では極めてジャーナリスティックであるともいえる。

4. ネットジャーナリズムの意味

新聞・雑誌の活字が独占していたジャーナリズムの世界に、放送という形態のジャーナリズムが登場したように、今、活字、放送がすみ分けている世界に、既存マスコミとは異なった新しいネットジャーナリズムが生まれようとしている。それは単に情報伝達・報道のメディアの多様化にとどまらない。独自の構造、表現形式を持つゆえに、接する人に独自の伝え方受け取り方、読み書き参加のリテラシーを迫り、ある意味では新たな価値観や文化を求めるものでもある。

その意味で、ネットジャーナリズムはジャーナリズムの世界を超えて、広く我々の社会全体にも新たな地平を切り開く可能性を秘めている。

☞詳しくは『放送研究と調査』9月号「インターネット空間におけるジャーナリズム・試論　～『ある火山学者のひとりごと』を例に～」参照。■

表1　三宅島噴火災害の動き

6/26	18:30　火山性群発地震	19:33　緊急1：噴火の恐れ 21:10～　阿古，坪田に避難勧告（2,600人） 都 災害対策本部 設置	最初の投稿番号　No.1607
27	午前中　島西方沖で海底噴火		一連の動き
29		18:00　臨時8［部会］：噴火の可能性ほぼなし	予知連，行政を評価
30		19:45　避難勧告全面解除	海底噴火，マグマ移動をめぐって
7/1	16:02　地震　神津島　震度6弱	都 災害対策本部 解散	
4	山頂直下地震頻発		
7/8	18:43　山頂噴火，噴煙1,500m，降灰，山頂陥没	19:25　臨時10：噴火 23:20　臨時11［部会］：山頂付近注意，山麓への影響なし	同　No.1803
9	03:57　地震　神津島　6弱		島民掲示板に初参加 陥没の実態，解釈をめぐって 新たな観光地にとの楽観的見方も
12		三宅新村長 無投票当選	
14	04:14　噴火，噴煙1,500m，降灰，噴石	06:45　臨時12：噴火 10:40　一部住民に避難勧告（17日解除）	陥没拡大，TV中継局倒壊 これまでにない噴火シナリオを めぐって危惧の書込みも 降灰による泥流の危険の指摘
15	この日まで断続的に噴火 10:30　地震　新島　6弱 有感地震頻発		
7/26	豪雨，泥流発生 有感地震頻発	三池，沖ヶ平などに避難勧告（28日解除）	同　No.2220 島民相次いで参加 泥流の危険性とその周知，被害， 村の泥流対策をめぐって マスコミの報道の少なさ，行政の対応 への批判 出始める デマ否定の投稿
30	21:25　地震　三宅島　6弱		
8/10	06:30　噴火，噴煙8,000m，噴石，降灰，空振	10:50　臨時13：噴火 神着～空港 避難勧告	同　No.2503 島民 現地からの噴火状況報告 降灰などの被害状況報告 島民に危機感拡がる 複数専門家による噴火シナリオ提示 震研 火山監視カメラ設置場所をめぐって マスコミ報道の少なさへの批判
12		台風接近のおそれで避難勧告	
13	以後ほぼ毎日 断続的噴火		
8/18	10:52　地震　式根島　6弱 12:49　地震　式根島　6弱 17:02　大規模噴火，噴煙14,000m，噴石，降灰，火山雷，鳴動，空振	17:20　臨時14：噴火 坪田，神着，伊ヶ谷，阿古に避難勧告（21日解除） 自動車のガラス多数破損，牧場の牛 死亡	同　No.2742 大噴火を島民が島内各地より実況 島民の新参加 著増 一般市民の新参加，投稿 増 危機切迫，島民に緊迫感 対応をめぐって都，村，国の行政 批判 「死ぬ」「殺される」の表現と削除 「避難の勧め」の島民折込みチラシ 公共事業，土建業をめぐっての非難 と削除 青ヶ島の悲劇をめぐっての投稿と削除 北海道から有珠噴火対応との比較での投稿 硫黄臭と火砕流対策，具体的逃げ方
	自主避難増加		
20		自衛隊災害復旧部隊 派遣	
24		22:05　臨時16［予知連］：7/8～8/18の噴火の解釈。山麓への噴石落下の注意。安全宣言 事実上の撤回。	
27		自衛隊災害復旧部隊 離島 副知事に全島避難要請，受け入れられず 島外への自主避難 続く（在島者2,400人）	
8/29	04:35　噴火，噴煙8,000m，低温火砕流	04:35　臨時17：噴火 都，国 災害対策本部 設置 児童生徒の集団避難繰上げを決定，実施	同　No.3756 島民火砕流下からの実況報告 島近親者，一般市民の新参加， 投稿増
	14:53，16:50　噴火		
30	04:24，12:52　噴火		
31		21:45　臨時18［予知連］：18，29日の総括。山麓での噴火の可能性なし。	行政対応批判 火山ガス関連の投稿増加
9/1		全島民島外避難指示（在島者1,600人）	
4		全島避難 終了	この日最後の投稿番号　No.4685

※ 緊急：緊急火山情報　臨時：臨時火山情報　臨時［部会］：臨時火山情報 伊豆部会コメント　臨時［予知連］：臨時火山情報 予知連コメント
データは『火山噴火予知連絡会会報第78号』，『気象年鑑2001』による

8月25日朝，三宅島で新聞をとっている約600世帯に，朝刊に挟み込まれて届けられたチラシ

島民の皆さんへ
これから申し上げることは、皆さんを恐怖におとしいれることになるかもしれません。
どうぞ落ち着いてこれを読み、身を守るため、ご自身で判断して行動してください。

■８月１８日の大噴火で降ってきた石は、命を奪うほど危険な大きさでした
８月１８日の大噴火で、大量の灰が降りました。　しかし降ったのは灰だけではありません。小石に混じってかなり大きな石も降りました。
　阿古と伊ヶ谷の間の都道の上には、一抱えもあるような大きな岩が飛んで来て都道にめり込みました。阿古の鉄砲場の下（ミロー化粧品のあたり）にも、直径８センチほどの石、その他、三池坪田地区でも、５～６センチクラスの石がたくさん発見されています。

　石はとても高いところ（どう少なく見積もっても数千メートル）から落ちてきます。
ものすごいスピードと破壊力です。
　皆さんは坪田で何十台もの車が、ガラスを割られているのをご覧になりましたか。車のガラスは強化ガラスと言って、とても丈夫に出来ています。それが破壊されるほどですから、どう少なく見積もっても金づちで思いきりたたかれるほどの衝撃は覚悟しなければなりません。
　２センチクラスでも頭に当たれば即死です。　５センチクラスならヘルメットも役立たないでしょう。　運がよければ大怪我で住みますが、即死の可能性のほうが高いです。

■多くの専門家が、次に噴火が来たら島は危険だと言っています
　火山噴火予知連絡会も、21日の発表で「今後も、１８日と同程度かこれを上回る程度の噴火が繰り返される可能性があります。」といっています。今回死傷者が出なかったのは奇跡的だったと専門家は言っています。
次に噴火が来たら大変なことになるかもしれないと、多くの専門家が言っています。
　これだけの石が降ったため、気象庁や予知連絡会も、とうとう今回の発表に、石が降ったということをいれざるを得なくなりました。予知連の会長も、そのあとの記者会見で、「当たれば死ぬ」とはっきりいっています。
　しかしマスコミはこれらの事実をあまり大きく報道していません。

■今すぐ、避難できる人には自主避難を勧めます。
　私は村長に対して、村長自身による全島避難勧告を強く迫りましたが、とうとう首を縦に振りませんでした。
その後村長は都に対して全島避難を要請したが、拒否されたと報道されています。
ほんとうにこのままでは死人が出る、と私は心配します。
　もし村と都が全島避難を勧告しないのならば、みなさん、少なくとも御年寄りや子供などを、すぐに島外に避難させてください。私自身すぐにも逃げたいのですが仕事があるため、それを放棄するわけにも行かないのです。
仕事を持っていない方はすぐ島を出たほうがいいと思います。

　次の大噴火は起こるかもしれません、起こらないかもしれません。
　これを読んで「たしかに危険だ。」と思った方は行動を起こしてください。
　「大丈夫だ」と思う方は無視してくださって結構です。　　このチラシのことは忘れてください。

　もしかしたら私は大嘘つきと、ののしられるかもしれません。
　それを覚悟で書いています。

　　坪田　渉辺義宗